

W・C・ミッチェルのベンサム論

—社会科学におけるニュートン—

佐々野 謙 治

は し が き

I ベンサム思想の時代背景

II ベンサムの幸福計算

III ベンサムの人間性の概念

むすびに代えて

は し が き

私は、先の小稿で次のように述べた。「後世云々される経済学の理論を構築した偉大な経済学者達の中で、学史的研究（過去の経済学の批判的研究）を行い、しかるべき学史の著作を公けにしている人は、決して少なくない。思うに、自らの理論を構築する過程において、人は学史的研究の必要に迫られるのであろう。自らの理論を構築しえた人は人で、その理論をしかるべく位置づけようとして、あるいは自らの理論の到達点を示そうとして、学史の著作を公けにするのであろう。とすれば、こうして公けにされた著作を検討してみると、その人の理論を解明していく上での大きな手助となるはずである。その人の構築しえた経済学の理論をポジとすれば、ネガに相当するのが、その人のなした学史的研究だ、とも言えるからだ。ところでミッチェル (Wesley C. Mitchell, 1874-1948) もまた、多くのエネルギーを学史的研究に注ぎ、かなりの頁数を有する学史の著作を公けにしているのである。『経済理論の諸類型——重商主義から制度主義まで』(Types of economic Thought——From Mer-

cantilism to Institutionalism) というのがそれである。やはりミッチェルも、自らの立場を学史的的研究を通じて位置づけし、今後の経済学の進むべき方向を示そうとしたのではないか。

とまれ、これからしばらく私は、ミッチェルの上述の学史の著作に展開された経済学批判の主要点を、整理・検討していく予定である。また、そのことを通じて私は、その批判の論点の背景にあると解されるミッチェル自身の積極的主張を浮き彫りにしていきたい。とはいえ、ミッチェルの学史の著作の中に出てくる経済学者の数は多い。従って、そのすべてを取り上げて整理・検討することは困難だし、またその必要もないであろう。上述した私の課題——ミッチェルの経済学批判の主要点を整理・検討することを通じて、ミッチェル自身の積極的主張を浮き彫りにするという私の課題——に関する限り、そうである。しかし、そうだとすると、ミッチェルの著作の中に出てくる多くの経済学者達の中から、一体誰を代表的なものとして取り上げて整理・検討したらよいのか。やはり、それなりの目安ないしは基準といったものが必要であろう。かくしてここに、ミッチェルの学史的・研究全体に関する諸見解を概観・整理することが必要になってくるであろう」¹⁾。

こうして私は、先の小稿で、その概観・整理を試みたのである。かくして導き出された結論は、こうであった。すなわち、「ミッチェルの経済学批判の対象として欠くことのできない重要な人とは、リカード (David Ricardo) とベンサム (Jeremy Bentham) とヴェブレン (Thorstein Veblen) の三人だ、と言ってよいであろう。従ってまた、ミッチェルの過去の経済学に対する批判の論点を整理・検討することを通じて、彼の積極的主張を浮き彫りにしようとするれば、少なくともその三人に対するミッチェルの批判の論点を整理・検討することが必要だ、と言えるであろう」²⁾。この小稿は、その三人の中のベンサム (Jeremy Bentham, 1748-1832) を取り上げたものである。何故ベンサムが、ミッチェルの経済学批判の対象として欠くことのできない人物なのか、という点については、小稿においても——というより小稿においてより詳しく——明らかにされるであろう。

<注>

- 1) 佐々野謙治「W. C. ミッチェルの経済学批判——その序説的考察」、『第一経大論集』第14巻第2号，1～2頁。
- 2) 上掲論文，21頁。

I. ベンサム思想の時代背景

ミッチェルの経済学史・思想史の研究手法から大方察しのつくことではあるが、彼のベンサム論はまず、ベンサムの生きた時代背景——功利主義思想が台頭してくる時代背景——を浮きぼりにする、ということから始められている。従って小稿も、ミッチェルの描くベンサムの時代背景を見ることから出発したい。とはいえ、この点に関するミッチェルの叙述はかなり詳しく、従ってそれにさかれている頁も決して少なくない。そこで小稿では、以下その概要だけを見ていくことにする。

「1800年後半の数十年は、並進した農業革命と産業革命とがイギリスの日常生活に累積的な変化を生じさせつつあった。すなわち、農業地方から工業都市へ人口を移動させ、古い職業を打破し、新しい産業を創り出し、賃金体制を確立し、実業家の地位を高めつつあった……地方においても都市においても、イギリス人の経済生活は、資本主義的な様式に向けて組織化されつつあった」¹⁾。利潤追求のみを目的とする、またそのための内的組織をもち、会計による合理的な管理計画に従って活動する、営利企業の出現は、経済行動の一般化・理論化に大きな機会を与えることになった。スミス (Adam Smith) は、この機会を最大限に利用し、『国富論』(1776) を公けにしたのであった。その後の14年間は、イギリスの経済的・政治的組織に全面的な改革を、つまりスミスの自由主義的見解にそった改革を、確かにもたらすかに思えた。そしてまた、それを人々は期待もしていたのである²⁾。

しかしながら、その改革の時代——当初ウィッグ党の、次いでトーリー党の統治下にあったその改革の時代——は、フランス革命の勃発によって、突然さえぎられたのであった。この革命の影響は、イギリスにおける改革運動と社会

諸科学の進歩に、強い反動を誘発したのである³⁾。

もっとも、フランス革命のニュースが伝わった当初の段階では、イギリスの国民の多くは、「この革命を人類の解放・自由を導く一大躍造として賞讃したのであった。イギリスの世論のリーダー達は、フランスの著名な知識人達の多くと密接な個人的関係をもっていた。このフランス人達の多くは、そうした関係にふさわしく実に再々イギリス流の自由主義的思想の主唱者であったのだが、彼らは独裁君主の下にあって迫害を受けるか、あるいはその危険にさらされていた。それが今や、イギリスの世論のリーダー達にとっては、彼らが個人的にも知りかつ信頼しているといった種の人達を、考えも彼らと似ていた人達を、ついにフランス国民が受け入れつつある、と思われたのである。それに、フランスの主権や政治機関も、イギリス式のそれにならって改革されつつある、と。なおまた、ブリテンの世論のリーダー達にとっては、ショッキングな財政の乱用も押さえられるであろうし、一般の人々に対しても広範囲の発言権が認められるであろう、と思われたのである」⁴⁾。イギリスの国民の多くが、フランス革命を、当初暖く見守っていたのみならず、「人類の解放・自由を導く一大躍進」として賞讃さえした所以である。

ところが、フランス革命の事態の進行に変化が生じ、「フランスにおける＜恐怖時代＞と今日呼ばれている事態の発生をみるや、イギリスの世論は急転した。というのも、今やイギリス人が個々に親しく交流していた友人達が、激変する社会での指導性を失って、次々とギロチンへの道を歩み始めたからである。特に、1791年に人民の支配から脱出しようと試みたルイ16世が、1793年に引き戻されて死刑の宣告をされた時には、フランス革命に好意をもっていたイギリス人達の間に恐怖の発作がおこった……そしてこの恐怖が極端なまでに強まっていったのである」⁵⁾。

そうした事態は「まず第一に、フランス革命の理論的擁護者達が彼らの考えを変えろという、あるいは彼らが人々の信用を失うという結果をもたらし、そして第二に、政治経済学を含む社会哲学に関する考察の大部分が、疑いの目をもってみられるという結果をもたらした」⁶⁾。例えばエディンバラにおける道

徳哲学の教授で、スミスの年少の友人の一人であったステュアート (Dugald Stewart) は、その講義で「政治経済学」という用語を口にするこゝさえも危惧しざるをえない、という有様であった⁷⁾。

政治において引き起された変化は、さらに一段と深刻なものであった。ウィッグ党は、二つの敵対する党派に分離してしまったのみならず、党の大半の人々が政府支持者となり、全力をあげてフランス革命に反対する者となった⁸⁾。かたやトーリー党も、1784年にピット (二世) が政権の座について以来、ずっと行ってきた社会・経済の改革から離れて、非妥協的な保守主義へと一転した。この変化を単的に示しているのが、ピット自身の考え・態度の変化である。彼は当初、腐敗選挙区の廃止や選挙法改正案を議会に提出する等、議会改革の擁護者であった。それがフランス革命の結果・変化を観察した今や、ピットは、かつて彼自身が提出したそれらの改革案に対して、徹底的な批判を加えたのであった⁹⁾。

また対外的にも、これまでピットは中立主義・平和主義をとっていたが、ついにそれを放棄するに至った。今やイギリス政府は、フランスでの出来事に対して受動的な態度をとることを断念し、フランスが大陸諸国と戦争を開始するや、対フランスとの戦争 (ナポレオン戦争) に突入したのである。1793年に始まったこの戦争は、1802—1803年の短い平和期間を除いて、1815年のワテルローの戦いに至るまで続いた。この間イギリスは大陸諸国と共に対フランス軍を形成し、この連合国に莫大な資金を供給する等、巨大な経済的重荷を引き受けたのであった¹⁰⁾。この巨大な経済的重荷・負担は、「国内における貨幣の不安定や、圧迫的諸課税、激増する債務、フランスによる商業の妨害等によって、ますます重いものになった」¹¹⁾。しかしながら、イギリスはその経済的重荷によく耐えたのであった。何よりも不断に進歩しつつけていた生産技術が、イギリスをして、その経済的重荷によく耐えさせたのであった。

フランスとの戦争を始めた頃のイギリスでは、「とりわけ繊維産業において、またその度合は劣っていたが他の一定の諸産業においても、一般に産業革命と呼ばれているものが相当の進展をみせ始めていた。生産技術の革命的改良・改

善がなされた。イギリス人達は、彼らの必要とするあらゆる種類の財を、以前よりもずっと能率よく生産する方法を学びつつあった。イギリス人が、限度を越すほどの過労に落ち入ることなく、経済的苦闘をよく貫きえた理由の大部分も、実はそこにあった」¹²⁾。要するに、イギリス人が対フランスとの戦争の重荷によく耐えることができたのは、産業革命のおかげであった。

なお「その期間を通じて、イギリスでは農業も大いに発展した。フランスとの戦争が始められる以前から、すでにイギリスは穀物輸入国になっていたから、その農業の発展は特に重要なことであった」¹³⁾。食料の大部分を外国に依存していたイギリスにとって、その食料の供給を切断しようとする戦時中のナポレオンの企て(大陸封鎖令)は、かなりこたえるものであった。こうして脅かされた食料供給の不足に対処すべく、イギリスの農業家は技術をさらに改善し、精力的に農業と取り組んだ。国内での食料・穀物価格の上昇が、それにさらに迫車をかけたのであった。地主達は所有地の大部分を耕作地に変え、多くの泥湿地の干拓もなされた。こうしてイギリスでは、食料の国内供給を一举に増大するために、農地の拡大や改善が著しく押し進められたのであった¹⁴⁾。

経済政策に関する限り、イギリス政府は、戦時中も自由放任によった。この間の産業や農業の発展ぶりを思う時、それは賢明であったと言ってよいであろう¹⁵⁾。なお再度ここに、国内政治・政策に目を転じれば、それは大きく変化した。先にも述べたが、ウィッグ党の大部分の人の接近によってその強化をみたトーリー党政府(ピット政府)は、かつての改革から現状維持へとその政策を転換させたのみならず、今や極度に保守・反動化し、進んで「反社会的抑圧政策」を打ち出したのである¹⁶⁾。

さて、フランス革命の事態の推移・変化は、「多くのイギリス人にフランスでは暴徒が支配権をとったが、イギリスでもそうなるのではないか、という恐れを生じさせた。多くのイギリス人は、共和主義者の魅惑的な諸原則が海峡を越えてくるのではないかと恐れ、また彼らの以前のフランスの友人達の生命がそうであったように、イギリス人の生命と財産の安全も脅かされるのではないかと恐れ」¹⁷⁾。こうした恐れは、フランス革命の友・支持者らの手によって

ロンドン通信協会が設立（1792年）されたことが知られるに至って、一段と強まった。「この協会は政治改革のための組織であり、その大部分は職人階級から成っていた。このメンバーのイギリスの知的な職人階級は、あらゆる社会問題に強い関心をもち始めていたし、また彼らの精神は実際、フランスでは彼らと同じ地位にいる人々が公的問題に対して相当の影響を及ぼし始めているということを知るに至って、大いに刺激を受けたのであった」¹⁸⁾。

そうした協会活動等がもたらす危険を避けるため、ピット政府は、抑圧的立法を通過させた。1792年に開始され、1795年にその頂点に達した、一般に「ギャグ法」として知られている二法、つまり「治安妨害行動法」と「治安妨害会合法」というのがそれであった。ピット政府はさらに進んで、一般に「結集禁止法」として知られているものを、1799年と1800年に通過させた。「これは、職人あるいは雇主のいずれの側にも、それがどのようなものであれ雇用調整のための結集を禁止する、という法令であった」。もっとも、この法令にふれて処罰された職人の数は実に多かったが、同一の理由で処罰された雇主はまずいなかった。「資本主義の発展は、すでに労働組合も発生させていた」が、ピット政府は、これも不法としてそれを禁止したのであった¹⁹⁾。

フランス革命後の事態の推移・変化は、こうして数年間のうちに、かつてはどの政府よりも寛大な自由主義的改革をもって知られていたピット政府を、極度に保守・反動化させたのであった。1806年にピットが死去し政権の座から去った後も、少なくとも対フランスとの戦争が続いていた間は、圧迫的政策はもちろん、保守主義的政策が保持されたのである。また実際、この傾向は戦後も相当の間続いたのである。この間は、まさに「立法的停滞の時代」と呼ぶにふさわしいものであった²⁰⁾。イギリスが自由主義への転換をはかり、いわゆる改革の時代をむかえるのは、1820年に至ってからなのである²¹⁾。

とかく「人は、イギリスの歴史は、諸制度の漸進的な、しかし着実な進歩によって特徴づけられており、この進歩は、イギリス人の生活に民主的な要素を漸次増加する方向をたどってきた、と考える。しかしながら、少なくとも約一世紀ほどの間は、進歩的な政策は中断されたのであった。もっとも完全に中断

されたというのではない。というのは、この〈立法的停滯〉の期間においても、19世紀後半にその姿を現したイギリスを生み出す歩みとなったと今日みなされる一定の諸方策が、議会において採用されたからである」²²⁾。若干の例を挙げると、1801年には10年ごとになされる「住民数の調査」が政府の手によって開始された。また1802年に政府は「一連の工場法」を通過させる第一歩を踏み出した。なお、奴隷売買も1807年には完全に廃止された等々²³⁾。

しかしながら、「産業革命と農業革命が人々の生活状態を驚くほど急速に変化させつつあった時代としては、その改革のすべてを合わせても、小さなものであった。全般的な政策がとられなかった結果、生活状態に生じつつあった諸変化へのイギリスの法的制度や行政実践の対応が、しばらく阻止された。また、その諸変化は成文法典上の法のいかに関係なく進行したので、その法律を緊急に変更する必要性がますます高まるという結果が生じた²⁴⁾……概して、社会的・経済的諸変化は、戦争や国内抑圧の諸政策によって、押し止められなかった。国家が背負った戦争の重荷は、社会的害悪をより耐え難きものとなり、政治的諸改革の必要を一段と緊急のものとした」²⁵⁾。

こうして緊急のものとなった「政治的諸改革の必要が結局、経済的・社会的諸問題に、人々の注意をスミスの時代よりもずっと多く集中させたのである。この政治的諸改革の必要は、経済的思考に新しい転回を与えた。それは、ベンサムと彼の弟子達に公けの人々が耳を貸す機会をもたらした。それは、マルサス(Thomas Robert Malthus)にかの問題をもたらした。それは、リカードと彼のグループが経済の理論化を行うのに大いに役立った。それは、哲学的急進派を台頭させた。それは、1820年代と1830年代の政治的・経済的な大改革を結果として生じさせた。これらの大改革の後に始めて、スミスのいう明白かつ単純な自然的自由の体制が地歩を得たのであった」²⁶⁾。

以上²⁷⁾、ミッチェルが描き出したベンサムが生きた時代背景——功利主義思想が台頭してくる時代背景——の概要を見てきた。それによると、ベンサムが生きた時代とは、産業革命と農業革命が並進して、経済を急速に変化させつつあった時代であった。この変化に対応する当時の法律や政治の改革は、単に立

ち遅れてたというに留まらず、フランス革命の影響を受けて極度に反動化した政府によって、著しく立ち遅れたものとされた。その反動化した政府・立法的停滞にもかかわらず、産業革命は自生的にたくましく進行した。従ってその分だけ、経済の変化に対応する当時の法律や政治の立ち遅れは、一段と著しいものとなった。こうして今や、法律や政治のその改革が、イギリスでは何よりも緊急な課題・必要事となったのである。ここに出現したのがベンサムであった。

経済の変化に対応する立法や政治の立ち遅れは、もちろん、多くの社会的・経済的問題を現出させた。ミッチェルによれば、「それらの諸問題を考察したリーダー達が、功利主義者達ないし哲学的急進派の人々であった……ベンサムは、その哲学的急進派の予言者であり、またこの派の人々の目から見て彼らの仕事に科学的基礎となると思えるものを提供したのである。スミスの影響力が強く伸張しつつあった時、一人の若きイギリス人が、スミスのそれをはるかに越える社会科学の野心的事業に基礎を与えようとして、その作業を密かに進めていた。この人がベンサムであった。彼は19世紀にあって、そういう人はまずほとんどいないのだが、スミスに次いで実際の影響を及ぼしかつ知的名声を博すべく運命づけられた人であった。しかし彼の影響の増大は、スミスのそれのように、決して穏やかなものではなかった。というのは、彼が最も重要な著作を公けにした時とは、イギリスの社会進歩の全過程が、丁度フランス革命によって暴力的に攪乱された時であったからだ」²⁸⁾。

もはやこれ以上、ベンサムに関するミッチェルの叙述を、ここに引くことは慎まなければならないであろう。ミッチェルが描くベンサムの時代背景を見ることが、ここでの目的であったからだ。そして、すでにそれを見てきたからである。

<注>

- 1) Wesley C. Mitchell, *Types of Economic Theory—From Mercantilism to Institutionalism*, New York, Augustus M. Kelley. Publishers, 1969, Vol. I, p.171.
- 2) *Ibid.*, Vol. I, pp.171~172.
- 3) *Ibid.*, Vol. I, p.172.

- 4) Ibid., Vol. I, p.172.
- 5) Ibid., Vol. I, p.174.
- 6) Ibid., Vol. I, p.174.
- 7) Ibid., Vol. I, p.175.
- 8) Ibid., Vol. I, p.175.
- 9) Ibid., Vol. I, pp.176~177.
- 10) Ibid., Vol. I, p.178.
- 11) Ibid., Vol. I, pp.178~179.
- 12) Ibid., Vol. I, p.179.
- 13) Ibid., Vol. I, p.179.
- 14) Ibid., Vol. I, pp.179~180.
- 15) Ibid., Vol. I, p.180.
- 16) Ibid., Vol. I, pp.180~181.
- 17) Ibid., Vol. I, p.181.
- 18) Ibid., Vol. I, p.181.
- 19) Ibid., Vol. I, pp.182~184.
- 20) Ibid., Vol. I, p.185.
- 21) Ibid., Vol. I, p.188.
- 22) Ibid., Vol. I, p.186.
- 23) Ibid., Vol. I, p.186.
- 24) Ibid., Vol. I, p.187.
- 25) Ibid., Vol. I, p.188.
- 26) Ibid., Vol. I, p.188.
- 27) 以上、全体をまとめるに当っては、大野真弓編『イギリス史』（山川出版社、昭和48年4月、193~214頁）と山田孝雄『ベンサム功利説の研究』（大明堂、昭和35年6月、10~33頁）も参照した。
- 28) W. C. Mitchell, op. cit., Vol. I, p.188.

II. ベンサムの幸福計算

すでに見てきたように、ベンサムは、何よりも経済社会の制度的改革——経済の変化に対応する法律や政治の改革——の必要に迫られた時代を生きた。この諸改革に「功利の原利」を掲げて立ち向った人、否、そのリーダーシップをとった人、それがベンサムであった。しかしミッチェルによれば、功利の原理・観念は世間の大勢であり、まさに資本主義を確立しつつあった時代の精神なのであった。すなわち、功利の原理・観念は、ベンサム自身も認めているように、決して彼のオリジナリティではなかった¹⁾。すでにそれはプリーストリー (Priestley) やエルヴェシウス (Helvetius) やベッカリア (Beccaria) にもあった²⁾。とすれば、ベンサムのオリジナリティはどこにあるのか。それは「方法」

の側にある、とミッチェルは言う。すなわち、「ベンサムを他の功利主義者から区別したもの、彼を一学派の指導者となしたものの……それは、彼が功利に関するあらゆる議論に厳密な方法を導入しようと努めた点にあった。彼は、立法、経済学、倫理学を真の科学になそうと考えていた」³⁾と。こうしてミッチェルは、ベンサムのオリジナリティとしての「方法」、つまりかの幸福計算の問題に入っていく。以下、それを順を追って見ていこう。

さて、ミッチェルは言う。「ベンサムは、あらゆる社会科学の問題に関する論議を、科学的水準にまで高める方法を見い出した、と考えた。ここにいう科学的水準とは、偉大なニュートン (Newton) が物理学に対して成し遂げたそれと大方一致するものを意味していた。すなわちベンサムは、何が人間行動を統御する諸力なのか、を示すことを企て、そして次に、これらの諸力がいかにして測定されえるのか、またこの測定によっていかにして計算の科学が樹立されえるのか、ということを証明しようとした。彼の夢は、計算という方法を押し進めることで、人間行動に関する科学を発展させることであつた。そのやり方の多くは、ニュートンが引力を取り扱うことによって、またその引力がいかに計算されえるのかを示すことによって、天文学を発展させたそのやり方と同じであつた。ベンサムは……道徳の世界のニュートンになることを夢みたのである」⁴⁾と。かく言うミッチェルは、ベンサムの未公開の原稿の中から次の叙述を引いてくる⁵⁾。＜法学、あるいはその他の道徳科学の分野の問題をめぐる、これまで公けにしてきた、あるいは公けにするであろう私の作品と同じく、現在のこの作品もまた、実験的思考方法を物理の分野から道徳の分野へ拡大しようとする企てなのである。物理の世界においてベーコンが占める位置を、道徳の世界において占めるのが、エルヴェシウスである。従つて、道徳の世界はそのベーコンをもっているが、そのニュートンに当るものはまだ現れていない＞。まさに自分がそのニュートンになるのだ、とベンサムは言うわけである。

そこでミッチェルは、まずこう問う。ベンサムのいう人間行動を統御する諸力（ニュートンのいわゆる引力に当るもの）とは何なのか、と。かく問うミッチェルは、ベンサムの『道徳及び立法の諸原理』(An introduction to the

principles of morals and legislation, 1789) から次の叙述を引いてくる⁶⁾。
 <自然は、人類を快樂と苦痛という二人の主権者の支配の下に置いてきた。我々が何をしなければならないかということを示すのも、また我々が何をするであろうかということを決するもの、ただ苦痛と快樂だけである。一方では善悪の基準が、他方では原因と結果の連鎖が、この二つの王座につながれている>。要するに、快樂と苦痛という二つの諸力が人間行動を統御する、とベンサムは言うのだ。

では、ベンサムのいうその二つの諸力はいかにして測定されうるのか。さらにこう問うミッチェルは、上に続けてベンサムから次の叙述を引いてくる⁷⁾。
 <その人だけとして考えられる人にとっては、それだけとして考えられる快樂と苦痛の価値は、次の四つの事情に応じて、より大きいものに、またはより小さいものになるであろう。すなわち、①その強さ②その持続性③その確実性……④その遠近性というがそれである……しかし、快樂または苦痛の価値が、それを生み出す行為の傾向を評価するという目的のために考察される場合には、あと二つの別の事情が計算に入れられなければならない。すなわち、それらは⑤その多産性……⑥その純粋性である……社会が考察される場合には、⑦その範囲を、つまり快樂と苦痛が及ぶ人の数を計算することが必要である>。要するに、基本的にはこれら快樂と苦痛の四つの局面を、全体では七つの局面——というのも快樂と苦痛はこうした多面的な諸力と解されるからである——を計算することによって、快樂と苦痛という二つの諸力を測定できる、とベンサムは言うのだ。

では、ベンサムのいうそれら七つの局面はいかにして計算されえるものか。この計算を行うとすれば、それなりの基本的単位が必要とされるであろう。では、その単位とは何か、またそれはいかに表現されるのか。この点に関してベンサムの言うところを、ミッチェルは以下のように整理している。

「何が快樂の強さを計る単位なのか。ベンサムはこの問題を考えて、次のように結論した。すなわち、強さの単位は最少の感覚でなければならない、と。内省によって人は、いかなる行為が快樂であり苦痛なのか、ということを決定

することができる。そして強さのより強い快樂は、このかろうじて知覚できる単位・最小の感覺（これが1の数で表現される）の多くを含むもの（例えば2, 3, 4等々）として計算されるべきである。持続性は、秒、分、時間、という時の単位で計られる。快樂はそれがより多くの強度の単位をもてばもつほど大きい、それと同じく、快樂はそれが長続きすればするほど大きい。確實性は、近さによって計られうる。現時点で享受している快樂は確實であり、これが1の数で表現されうる。将来に期待される快樂はその度合も様々で不確實である。そして、これらの相対的な確實性は、分数によって表現されうるし、またこの確實性がより遠くなる場合には、減少する分数で（たとえば $\frac{1}{2}$, $\frac{1}{3}$ 等々）によって表現されうる。遠近性は、快樂が丁度現在ある場合には、1の数で表現されうるし、また期待されている快樂がますます遠ざかっていく場合には、減少する一連の分数によって表現されうる。快樂は遠くにあればあるほど、それが現在の瞬間において行動を決定する力としては弱いのである……多産性は、個人がある快樂ないし苦痛を利用するやり方を学んだ場合、それらが増大していくという快樂ないし苦痛のもつ性質であり、従ってそれは、将来の快樂ないし苦痛のその増大量を示す加算によって表現されうる。また純粋性も同じだ。すなわち、人は快樂からその中に混入している何らかの苦痛を差引かなければならない。しかも人は、快樂の中に混入しているこの苦痛を、快樂の場合と同じくその強さ、確實性、遠近性を考慮して計算した上で、差引かなければならない。苦痛を取り扱うには、人は、それが含んでいる快樂の量を計算し、この快樂を差引かなければならない……研究者が範圍を取り扱う時には、彼は、あらゆる個人を一人とみなさなければならない……国王の民の最も賤しい人によって得られる快樂も、その計算においては、国王自身の快樂と全く同様に重要なのである。すべての人間は同じものとして計算されなければならない」⁸⁾。

以上見たような整理を、ベンサムにそくして試みたミッチェルは、次に、これらの計算がはたして実際になしえるものか否か、という点の検討に移る。彼は言う。「それらの計算をなし応用するに当っては、ある種の困難があった。

ベンサムはその困難と力の限り戦ったのである」⁹⁾と。さて、その困難とは何なのか。またこの困難にベンサムはいかに対処しようとしたのか。今や、ミッチェルのベンサムの言及は、その点の整理・検討に移る。以下、その概要を順を追って見ていきたい。

まず第一に、社会科学において幸福計算を行おうとすれば、人は、「異なる人々の感情が真に比較できるものか否か」という問題に直面せざるをえない。例えば、経済学の研究を行う際に生じてくる問題に、1ドルという一定額の貨幣は異なる人々に同じ量の享楽を与えるものなのか否か、という問題がある。これに対する意見は今日でもかなりまちまちなのだ。多くの経済学者は、異なる人々の感情を比較することはできない、と言う。他の経済学者、例えばマーシャル (Alfred Marshall) は、おそらく異なる個人の感情を比較することはできないであろうが、しかし個人の集団が同じような環境の下で生活している限り、この個人集団の感情を比較することは相当にできるであろう、と言う。この問題に対してベンサムは時に多少の動揺を示しており、その考えも必ずしも一貫してはいない。ところで、その困難にベンサム直面した際、彼が議論の依り所としたのは、「人間感情の同等性を前提にすることが必要だ」、というものであった。彼は言う、＜異なる人の幸福の計算可能性とは、厳密に考えたらフィクションだと思えるかもしれないが、それがなければあらゆる政治的考察が行きづまってしまうような前提なのだ＞と。こうしてベンサムは、もし倫理学または政治学があるとすれば、「異なる人々の幸福感は同じである」と仮定すべきだ、という結論に達したのである¹⁰⁾。

第二の困難は、「人は彼自身の快楽の強さを計算することができるのか否か」という問題である。強さとは、ベンサムが快楽と苦痛の計算に際して考慮した最初の局面であった。くり返し考えた後に彼にわかったことは、こうであった。すなわち、「人はそれが何であれ自分が体験した快楽と苦痛にどれ位の単位の強さが含まれていたかを示すことができる、などと簡単に言えはしない」ということであった。しかし、それでも彼は次のように言う。＜快楽としてかろうじて区別されうる最も弱い快楽がもつ強さの度合が、1の数によって表現

されうるであろう。そのような強さの度合は日常の経験の中にある。いかなる快楽であれ、その強さがますます強まっていくのが認められる場合の快楽は、その強さが強まっていくのに応じて、ますます大きくなる数によって表現されるであろう」と。他方しかし彼は、強さは「測定できない」と正直に言う。ここでもまたベンサムは動揺しているわけである¹¹⁾。

第三の困難は、「人は質的に同じでない快楽ないし苦痛を量的に比較しうるのか否か」という問題である。例えば、ベンサムが「親睦の快楽」と呼んだところのものと「味覚の快楽」と呼んだところのものを人は比較しえるのか否か、ということだ。ともかく幸福計算がなされるとすれば、これらの異なる種類の快楽のすべてを共通分母で考える何らかの方法が見い出されなければならないし、またあらゆる種類の苦痛に対しても共通分母が考えられ、苦痛が快楽から差し引かなければならない。そうしなければ、所与のいかなる快楽の純粋度も決定されえない、ということになるからだ。この問題を後に考えたベンサムが達した結論とは、「異なる種類の快楽と苦痛を比較する最上の望みは、その各々を貨幣の等価によって表現することだ」、というものであった。この点での彼の見解は「貨幣尺度」の利用を云々するマーシャルの見解に先何している。マーシャルは、経済学が貨幣を中心にしているのは、動機の諸力を測定するのに経済学者がもった唯一の手段が貨幣であったからだ、と解しているのである。ちなみにベンサムの叙述に注目すれば、こうだ。「もし、一つは貨幣の所有によって生じ、他のもう一つはそうではないという二つの快楽があり、人がその両方を同じように喜んで享受するとすれば、このような二つの快楽は同等と評価されてよいであろう……故に貨幣は後者の快楽の尺度ともなる。苦痛と苦痛の間でも同じである……貨幣は苦痛と快楽を計る尺度である」。だからといってベンサムは、貨幣がその正確な尺度になるとは考えてはいない。しかし彼は言っている。「この手段に満足しない人は、何らかの他のもっと正確な尺度を見い出さなければならないし、そうでなければ政治学や道徳科学に別れをつけなければならない」と¹²⁾。

最後に、今一つの第四の困難は、「富の効用逓減」という問題である。すな

わち、＜富の部分によってつくり出される幸福の量は、その部分を増すごとに減少していく。第二の部分は第一の部分よりも、第三の部分は第二の部分よりも、より少ない幸福をもたらす＞。このことに気付いたベンサムは、大きな困難にぶつかった。年収100万ポンドの国王と20ポンドの労働者を考えて、彼は次のように言う。＜国王の胸中における快楽の量は当然、労働者の胸中におけるその量より大きいであろう…しかし何倍だけ大きいであろうか。5000倍か。これは明らかに誰もが言おうとするところより大きい。しからば1000倍か、5倍か2倍か……労働者の5倍とって極めて大きいものに思えるし、2倍とってさえ寛大なものであろう＞と。この大きな困難にぶつかったベンサムは、しかし少なくとも一時は、それを乗り越える道を見い出したと思った。すなわち彼は言う。＜貨幣は快楽を計る支配的な道具であるから、論争の余地のない経験からして明らかに言えることは、現実の快楽の量は、あらゆる場合において、貨幣の量とあれこれの比を保って増減する、ということだ。この比の法則に関していえば、何であれこれ以上決定しがたいものはない……それにもかかわらず、通常生じているような比（少量）に関していえば、他の事情が同じであるならば、快楽と快楽との間の比は金額と金額との間の比に等しいということ、これは実践にとっては十分な真実である……従って我々は、一般的に云々するならば、二つの金額によって生み出される少量の快楽は、これを生み出している二つの金額と同じだ、と真実言ってもよいであろう＞と¹³⁾。

かくいうベンサムは、言葉を換えれば、「幸福計算を展開するに当っては、快楽や苦痛の少量の増加を取り扱い、かつこれを比較する方が、快楽や苦痛を全体として比較するよりもずっと容易だ、ということをも認めるまでになったのである。しかし彼は、快楽や苦痛をある限界において考える可能性を、決して理解しなかった。そして、幸福計算に重要な追加を成す考えは、比較のために限界的増加をとってみるという考えなのである。こうした考えの追加が、ベンサムの死後の世代の人々、つまりイギリスのジェボンズ (W. Stanley Jevons) や、オーストリアのメンガー (Carl Menger)、スイスのワルラス (Leon Walras) のような著者達によってなされたのである」¹⁴⁾。

以上、ベンサムの幸福計算が実際に適用される場合の困難をめぐって、ミッチェルが詳しく整理・検討している箇所の概要を、順を追って見てきた。ところで、ミッチェルによれば、功利主義者ベンサムのオリジナリティは、人間の功利・幸福を計ることによって、彼がすべての社会科学——もちろん経済学を含む——を科学的に基礎づけようとした、その「方法」の側にあった。言葉を換えれば、功利主義者ベンサムのオリジナリティは、彼の幸福計算にあった¹⁵⁾。ミッチェルがベンサムの幸福計算に立ち入った言及を試みた所以であろう。この言及の過程でミッチェルはまた、ベンサムの幸福計算のアイデアが、ジェボンズやメンガー、ワルラスらの経済学再建に大きく貢献したことを、明らかにしてもいた。しかし、ベンサムの幸福計算それ自体に関して言えば、ミッチェルは、それが実際に適用される場合の困難を云々し、つまるところそれを失敗・不可能だとして否定しているのだ¹⁶⁾。そしてまたベンサム自身、実際には幸福計算を試みてもいないのである。かくして、以下に引く行文は、ベンサムの幸福計算を整理・検討してきたミッチェルが、この点に関して下した結論だ、と言ってよいであろう。

ミッチェルは言う。「ベンサムの＜科学＞は、測定ではなくて分類に終わっている。彼の類型の社会科学は、数学的ではない、つまり計算の科学ではなくて、ヴェブレンが分類学と呼んだところのものである。それは彼の時代の物理学よりは、むしろ植物学に似ている。すなわち、彼は快楽や苦痛の量を判定する際に考慮しなければならない諸事情の体系的な分類を行っている、ということだ。彼は、整理を行うほどには、説明も叙述もしない。問題の一定の諸要素に対する彼の関心は、この諸要素を適当な整理箱の中に入れることであった。それがなされると、彼の科学的仕事は満足になされた、ということになる。彼は、道德の分野でのニュートンというよりは……むしろリンネ (Linnens, 植物分類法の創始者) である」¹⁷⁾と。要するに、道德の世界・社会科学の世界でニュートンたらんとしたベンサムではあったが、そうなりえなかった、というのがミッチェルの下す結論なのである。

こうしてミッチェルが、ベンサムのオリジナリティを彼の幸福計算に求めな

がらも、つまるところそれを不可能だとして否定していることを知った今、ここに次の疑問が湧いてこないか。すなわち、ミッチェルは何故に、彼の経済学史の著作で、ベンサムを取り上げなければならなかったのか。それは、ベンサムの経済学に関する著作の故にか。否、この点でのベンサムに対するミッチェル評価は決して高くない¹⁸⁾。実は、ミッチェルがベンサムを彼の経済学史の著作であえて取り上げた所以は、何よりも、幸福計算の背後にあると解される人間性の概念にあるのだ。ミッチェルは、この「人間性の概念」への言及を、先に見た幸福計算の整理・検討に直ちに続けて試みているのだが、しかしこの点に関して見ることは次章に委ねたい。

<注>

- 1) この点について西尾氏は次のようにいわれる。「……<功利の観念>や<最大多数の最大幸福>がベンサムに発するものでないことを過度に強調するよりも、むしろ彼がそのような功利主義的な時代思潮の中で思考しつつ功利主義を抽象的次元から実際の次元へ置換し、これを実際の改革の具体的照準として確立していった側面をみるのが重要であるというべきであろう」と(西尾孝司『イギリス功利主義の政治思想』, 昭和46年6月, 66頁)。
- 2) Wesley C. Mitchell, Bentham's Felicific Calculus, in The Backward Art of Spending Money and Other Essays, New York, Augustus M. Kelley, Inc., 1950, p.178.
- 3) Ibid., p.180.
- 4) Wesley C. Mitchell, Types of Economic Theory—From Mercantilism to Institutionalism, New York, Augustus M. Kelley. Publisher, 1969, Vol. I, p.202.
- 5) W. C. Mitchell, op. cit., p.180. こうしたミッチェルの見解に言及して、ハミルトンはこう述べている。「……快楽主義は人間行動に対して適用されたニュートン主義であるし、またニュートンの力学的変化の概念は、快楽主義的に人間行動の動きを説明するのに用いられる」と(David Hamilton, Evolutional Economics—A Study of Change in Economic Thought, University of New Mexico Press, 1953, p.41)。
- 6) Wesley C. Mitchell, Types of Economic Theory—From Mercantilism to Institutionalism, Vol. I, p.203. この引用から読みとれるように、ベンサムは、事実(存在)と価値(当為)とを結びつけている。この点が、いわゆる「自然主義的誤謬」(ムア)として、多くの論者によって批判されてきた点である。ミッチェルもやはりそうした批判に与しているとみなしてよいであろうが、その批判の口ぶりは穏やかである。すなわち彼は言う。「近代の見地からすれば、何であるのかということ、いかにあるべきかという二つの問題は区別される、と一般に考えられている……一般的に言って、科学者がこう考えることは確かだ、何であるのかということについての説明と、いかにあるべきかということについての計画は区別されるべきだ」と(Ibid., Vol. I, pp.221~222)。

- 7) Wesley C. Mitchell, Bentham's Felicific Calculus, in *The Backward Art of Spending Money and Other Essays*, p.189.
- 8) W. C. Mitchell, op. cit., Vol. I, pp.203~205. なお () 内は佐々野。
- 9) Ibid., Vol. I, p.206.
- 10) Ibid., Vol. I, pp.206~207.
- 11) Ibid., Vol. I, p.207.
- 12) Ibid., Vol. I, pp.207~208.
- 13) Ibid., Vol. I, p.209.
- 14) Ibid., Vol. I, pp.209~210. ほぼ同様の内容の叙述が、ホイタッカー (Edmund Whittaker, *School and Streams of Economic Thought*, Chicago, Rand McNally and Company, 1960, pp.263-264) や、スピーゲル (Henry William Spiegel, *The Growth of Economic Thought*, New Jersey, Prentice-Hall, Inc., 1971, p.517), また、オーサー (Jacob Oser, *The Evolution of Economic Thought*, New York, Harcourt, Brace and World, Inc., 1963, p.114) らによってもなされている。なお清水氏は、ベンサムの効用通減のアイデアがピグー (Arthur C. Pigou) にまで影響している、と次のように述べている。「これ (効用通減のアイデア) は先ず、ベンサムによって道徳および政治の原理として明らかにされ、次いで、いわゆる限界革命を通じて経済学の根本に据えられ、最後にピグーの『厚生経済学』によって倫理学と経済学とを統一する原理の一つに高められた」(清水幾太郎『倫理学ノート』, 岩波書店, 1976年2月, 54頁)。
- 15) ヴァイナー (Jacob Viner) は、この幸福計算もベンサムのオリジナリティではない、とミッチェルの解釈を批判している。彼は、それも「世間の大勢」であったことを指摘し、最後にこう述べている。「ベンサムの幸福計算は、18世紀の社会<科学>の開業医達が、数学・精密科学・一般と高度の能力の一つである数量化・に対してもった、劣者意識の単にもう一つの表明に他ならない」と (Jacob Viner, *Bentham and J. S. Mill: The Utilitarian Background*, in *The American Economic Review*, 1949, March, p.368)。
- 16) Wesley C. Mitchell, op. cit., p.231.
- 17) Ibid., Vol. I, p.232.
- 18) 経済学に関するベンサムの著作には次のものがある。Defence of vsury (1787), *Manual of political economy* (1793). ミッチェルは経済学者としてのベンサムは「決して一流ではない」(Ibid., Vol. I, p.233) と言い切っている。

III. ベンサムの人間性の概念

ベンサムの人間性の概念に関するミッチェルの言及を取り上げる前に、まず明らかにしておきたいことは、経済学と人間性の概念との関係をミッチェルがいかにかえていたか、ということだ。

さてミッチェルは言う。「経済学とその発展を考察する経済学者は、人間行動の経済外の局面にも注意を払う必要がある。このことは、経済学者が彼の分野について学べば学ぶほど、ますます明らかになってきていることだ。経済学

者は確かに、彼らが人間性に関する彼らの一般的観念をそこから抽出してくるこの人間知識の分野に、最も著しく深く依存しているのである。というのも彼らは、人間性に関するあるかなり明確な概念を前提にしないことには、彼らが予期する人間行動の仕方に関して、何ら建設的な説明をすることができないからである。このことは、何らかの意味で思弁的な類型の経済理論のすべてに、特に言えることだ……経済学は元来、人間行動に対する組織的・整序的な観察から生れた一大体系ではなかった。それはむしろ、観察的基礎を踏み越えた、一連の思弁的な叙述であった。すなわち、特定の理論家達が予期する所与の状況下での人間行動の仕方に関する叙述であった。そうした予期の大部分は、思弁家・理論家が人間性に関してもつ信念によって、導かれているのである」¹⁾。

ミッチェルは続けて言う。「経済理論家がそのことを明白に理解し、人間性に関して彼がもつ仮説を明確な用語で表示しようと努めるということは、決して容易なことではない。ほとんどの場合にそうなのだが、議論全体が究極的に依存する基礎的仮説への言及はなされないままに終る。また、理論家によくありがちなことなのだが、彼らは自分がもっている何らかの心理学的な種の仮説に気付かない。あなたはそうした種の仮説を立てているのではないと言われると、かく言われた理論家は、少なくとも最初は、それを非難と受け取りがちであり、おそらくは反感をこめて、それを否定しがちであろう²⁾……しかしながら、いかなる人の経済理論の体系といえ、この体系が人々は何を行うであろうかということに関する推論・理論から成っている限り、それは、暗示的であれ明示的であれ、人間性に関する彼の考えに基礎を置かざるをえない、ということは明らかなことではないのか³⁾……ほとんどの経済理論が、一定の状況下で人々は何を行うであろうか、ということに関する推論から成っている。そして、理論家がその推論・理論を構築する時にはいつでも彼は、彼のその理論の全体系を人間性に関する暗黙の概念によって構築しているのである。理論家がそのことを自覚していようがまいが——これまで大半の理論家はその事実を余り深く自覚してはいなかったのだが——彼はそうしているのである」⁴⁾。

以上、ミッチェルの言うところによれば、経済学は必ずや何らかの「人間性

の概念」を前提にしているのである。経済学者がそれを意識していようがまいがそんなのだ。この点に関連して想起されるのが、次のミッチェルの見解である。すなわち、経済学が前提にしている人間性の概念——経済的学者がいかなる人間性の概念をもっているか——が、その経済学を「類型」として区別せしめる重要なメルクマールの一つだ、とミッチェルは解していた⁵⁾。言葉を換えれば、経済学が前提にしている人間性の概念が、その経済学を大きく特徴・性格づけている、とミッチェルは解していた。他ならぬここに言う「人間性の概念」を誰よりも明白に定式化したのがベンサムだ、とミッチェルは言うのである。そしてまた、ミッチェルが彼の経済学史の著作で独立の章まで設けてベンサムに言及している所以も、実はそこにあるのだ。以下この点について、ミッチェル自身に語ってもらおう。

さてミッチェルは言う。「厳密に言うならば、ベンサムは政治経済学の理論形成に多くの個人的貢献をした人ではなかった。それでも、私が大きな誤りを犯していないとすれば、彼は、経済理論の発展に最も有力な影響を及ぼした人々の中の一人であった。彼がそうした影響を及ぼした原因は、彼の同時代の人々の間に普及していた人間性に関する考えを彼が他の誰よりも明示的に定式化した、という事実にある……スミスや彼の継承者達から我々が得る人間性の概念に関する観念は、他のどの著者達よりもベンサムがより正確に定式化したものなのである⁶⁾……くり返して言うならば、ベンサムは、人間性に関する彼の時代の人々の考えを、他の誰よりも明白に定式化した。彼は、彼の時代の人々が実際に云々していたところを、彼らが理解する手助けをした。彼が経済理論の発展に大きな影響を及ぼした所以もそこにある⁷⁾……ベンサムの一般的概念は今や広く普及しているのであるが、それは理論家が推論に用いるのに極めて都合がよいと感じるものであり、またそれは、理論家が自分がさらされている危険を自覚していないならば、いかにも依存しそうなものである……現在の正統派理論の大部分は、ベンサムがそうしたフォーマルな形で描き上げたものとさほど違いのない、人間性の概念に依存しているのだ」⁸⁾。

では、そのベンサムの人間性の概念とはいかなるものなのか。ミッチェルは

言う。それを知るには、彼の代表作・『道徳及び立法の諸原理』を見るのが最もよい、と。かくしてミッチェルは、先に見た幸福計算の整理・検討に直ちに続けて、その背後にあると解されるベンサムの人間性の概念の整理に移る。以下、それを順を追って見ていきたい。

第一に、「人間性は全く快樂主義的」である⁹⁾。ベンサムは言っていた、＜我々が何をしなければならないかということを示すのも、また我々が何をするであろうかということを決定するのも、ただ苦痛と快樂だけである＞と。また彼は言う。＜つまるところ、何らかの形の快樂を享受しようとする、また何らかの形の苦痛を避けようとする、その期待だけが動機の性質で働けるものである＞と¹⁰⁾。こうしベンサムは、すべての人間行動は、實質的には快樂を得、苦痛を避けようとする動機だけによって導かれている、と言うのだ。また彼は、この面での人間の心の働きを、綿密かつ巧みに説明している。要約すれば、それはこうである。「ある人の快樂の觀念（快樂を得ようとする、あるいは苦痛を避けようとするそれ）はまず、その人の意志に訴える。もしその觀念が明白でも明確でもないならば、意志はその觀念を理解に委ねる。そこで理解は、その行為がなされるに値するものか否かを決定し、かつそのための適切な手段を選択することに向う。そして、もし理解という全体的な知的働きがその行為を是とするならば、その知的働きは再び意志にもどっていき、意志が人を行為に移させる。——この間に要するのは、一秒の何分の一であったり、場合によっては、入念な熟慮の数年間であったりする。かくして、まず第一に人間性は、最も嚴密な意味において、快樂主義的なのである」¹¹⁾。

第二に、「人間性は合理的」なものである。人間は「計算をする生きもの」である。情熱は計算しない、という反対論に対して、ベンサムはこう答えている。＜快樂と苦痛というような事柄、しかも最も重要な事柄——要するに重要たりえる唯一の事柄——が問題になっている時に、計算をしないという人がいるであろうか。人間は計算をする。なるほど、計算の正確さのより少ない人もより多い人もいるが、ともかく人間はすべて計算をする。私は狂人でさえも計算しないとは言わない。すべての人の情熱は多かれ少なかれ計算する……すべ

ての人々・種々の人々が……彼らを行爲にかりたてる動機の性質に応じて計算するのである」と。こうしたベンサムの見地からすれば、経済学は、その他のいかなる関連学科よりも、ずっと科学としての完成に近づきえるものだ、ということになるであろう。というのも、金銭的利害の動機が、人々をして最も一般的かつ正確に計算させる動機であるからだ¹²⁾。すなわち、この動機に導かれる人間行動を分析するのが経済学だとすれば、この学科こそ、人間行動を科学的根拠（最も正確な計算）に基づいて分析する機会に最も恵まれている、ということになるからだ。

第三に、「人間性は本質的に受動的」である。人間は、行動する性向をもたず、環境に発する快楽と苦痛の諸力によって押されたり引かれたりしているにすぎない。人間性は本質的に能動的である、という考えは、ベンサムとは全く無縁なのだ¹³⁾。すなわち「人間の行爲は……快楽を得、苦痛を避けようとする動機の絶対的支配下にある……従ってまたそれは、なされる行爲に応じた利害が認められ理解される限り、その利害の絶対的支配下にある」と彼は言うのである¹⁴⁾。こうした意味で人間性はあくまで受動的だとするベンサムの見解は、「社会科学の課業を大いに単純化する。というのは、何をするのが人間の利益になるのか、ということが明らかにされる時にはいつでも、何を人間はなすであろうか、ということが推論されえるからである」¹⁵⁾。また彼によれば、人間は労働を好まない（嫌う）という意味においても受動的なのである。ベンサムの心理学的議論の中で最も精緻なものが『行爲動機の一覧表』(A table of the spring of action) なのであるが、それによれば、味覚、性、富、親睦、名声、等々労働に至るまでの11の項目中、労働を別にしてそのすべてが、快楽と苦痛の両方を含むものとされているのだ。すなわち、最後の労働の項目は苦痛だけを含むものとされているのである¹⁶⁾。

今一つの特徴は、「人間性がもちえる唯一の欠陥は理解の欠陥だ」、ということである。ベンサムの解するところによれば、人間は悪い動機というものをもちあわせていない。というのは、快楽を得、苦痛を避けようとする動機だけしか、人間はもち合わせていないからである。そして人がこの動機に従う限り、

彼は良い動機に従っていることになるからである。しかし、この動機に導かれてなされる行為が快樂よりも多くの苦痛を与える、という意味で、人が悪い行為をしているということはあろう。特に、その行為が他人に対して快樂よりも多くの苦痛を与える、という意味で、人が悪い行為をしているということはある。しかし人がそうした悪い行為をするのは、その行為の結果を人が理解しないからだ、とベンサムは言うのである。すなわち、＜いかなる場合においても、人間の意見や行為の誤りである限り、生来の知的な弱さが、あれこれの名称で呼ばれている偏見が、そのいずれもの誤りの原因をなすと思われる＞と。かく言うベンサムによれば、「人間の行動に統一性が欠けているのも、快樂と苦痛を計算する人間の知的能力に相違があるからだ」、ということになる。従って、もしすべての人々が同じ知的水準をもち、同じ状況の下にいとすれば、彼らのすべてが同じように行動するはずである。文明人と野蛮人を別つ唯一の理由も、文明人が野蛮人よりも快樂と苦痛のよき計算者だという一点に求められる。そこでベンサムは言う。＜彼らがこれまで心に刻みつけられてきた觀念の種類と程度が……現在の教育制度の下で十分な教育を受けた青年の心と同年のエスキモー人あるいはニュージーランドの土人の心との間にある違い——いかなるそれであれ——の唯一の原因なのである＞と¹⁷⁾。不平等や失策もまた、知的誤謬のせいに、つまり計算機械としての人間のなす理解の失敗のせいに、されるのである。

故にそのベンサムにあっては、「人間の行動を改善し、人間の福祉を向上させるに足りる方法は教育」に求められる。人が彼の行為を完全なものにするために必要とする一切は、彼を良き計算機——という意味は一定線の行為からどんな快樂が得られるのか、あるいは一定線の行為がどんな苦痛を与えるのか、ということを経験するということだ——になさしめるような種の訓練である。従って、ここにいる訓練をなす教育こそ、ある意味では、およそ価値ある社会運動が目指す唯一の対象だ、とベンサムは言うのである。すなわち、＜理解は諸觀念の結合によって生み出されるものであるから、その適切な結合と強化が教育の一つの大きな目的でなければならない＞と。かく言う彼はまた、そ

の教育の目的・原則を、彼の諸制度の改革案の基礎に置いたのである。すなわち、ベンサムにとっては監獄も、性格改革のための学校なのであった。「受刑者に快楽や苦痛の観念とある諸行為を正しく結びつけるやり方を事情に応じて教える機関であった」。また、「統治者の任務や立法の役目も、人々をして快楽や苦痛の観念を正しい目的や行為と結びつけさせるようにすること」であった。イギリスの学校制度の初期の改革者の一人としても知られているベンサムは、確かに、多くの時間と注意を学校計画案に注いでいる。この計画がまた、「快楽と苦痛とを正しく結びつけることができるように学生の能力を改善すること、つまり学生を良き計算機となすこと」を企図していた¹⁸⁾。

以上、ベンサムの幸福計算の背後にあると解される人間性の概念について、ミッチェルの整理するところを、さらに要約する形でたどってきた。では、その人間性の概念に対して、ミッチェルはいかなる批判を行うのか。以下、この点についてミッチェルの言うところを見てみたい。

ミッチェルは言う。「ベンサム自身の見地からすれば、人間行動を真に科学的に説明するには、ただ二つの方法だけがある。社会科学者は、行為を現に統御している快楽と苦痛の諸力を取り扱うべきだ。しかし、彼がともかく何らかの観察者であるならば、彼は次のことに留意するであろう。すなわち、人間は良き計算機などではないから、学識ある一理論家として自分が快楽ないし苦痛の見通しに関して推測で計算しているものは、一定の行為によっては支持されても、それが他のあらゆる人々によって承認されることを期待することはできない、ということに彼は留意するであろう。人々の多くは、それが何であれ一定の反応を合理的に計算はしないであろう。そして人々がまずい計算者である限り、科学者の理論つまり科学者自身の快楽や苦痛の推測に基づく理論は、人々が何をなすであろうかということを、正確に示さないであろう。

かくして理論家は、種々の階級の人々の理解の諸欠陥を研究しざるをえなくなるし、またその諸欠陥を彼の理論において考慮しざるをえなくなる。研究者は気付いているであろうが、これが古典派経済学者がなそうとしていたことであった。これがマルサスが実際になそうとしていたことであった。というの

も、彼は次のように言っているからである。すなわち、労働者階級は、彼らの見通しの欠陥の故に、余りにも早く結婚し、そして余りにも多くの家族をもつことで、彼ら自身の身の上に実に悲惨な苦痛をもたらした、と。人間性の標準的な欠陥の一つに関するこの見解は、古典派経済学者によって取り上げられ、彼らの理論の基石とされた。例えばリカードは、人間は国内投資と海外投資の相対的利益の決定を全く合理的になさない、と仮定した。…他にも例がある。すなわち理論家達は、繁栄の時期には人々は余りにも興奮してしまうと言うことによって、つまり人々は彼らの感情が彼らの企業計算を偏らせることを許すと言うことによって、自分達は景気循環を理解したのだと考える。

概して、人々がいかに行動しようとしているのかということについては、広範囲にわたって存在する人々の誤った理解を考慮することによって説明できるのである。しかし、その種の作業・操作も、決してさほど確かなものではない。その他にただ一つだけ人間行動を検討する方法がある。すなわち、人々が何をなすかを実際に観察することが、それである。これは、ベンサムも当時の人々の誰も、それに頼ろうとは考えなかった手法であり、まさに今日(1926年)経済学者やその他の社会学者が、それを採用し始めている手法である」¹⁹⁾。

以上、ベンサムの人間性に関するミッチェルの批判は、現実的・経験的視点からなされたものであり、少なくともそれと原理的に対決するという形でなされたものだとは言いがたい(一体それは何故かという点については小稿を閉じる際の問題として残しておきたい)。すなわちミッチェルはこう述べていた。現実の人間はベンサムが言うように合理的な存在ではない。ベンサムに依拠した古典派経済学者達が、種々の人間のもつ理解の欠陥・非合理的側面を考慮しざるをえなくなったのもそれ故にだ。しかし、古典派経済学のこのやり方もまた、決して充分なものではない。経済学者は、あくまで現実の人間行動を観察すべきである、と。要するにミッチェルは、それが何であれ先験的にこれといって人間性の概念を不動のものとして規定してかかるやり方に反対しているのであり、極力それを避けようというのである。

ところで、ミッチェルのベンサムへの言及は、さらに続けられる。すなわ

ち、ベンサムの人間性の概念と関連づけて、ミッチェルは、若干の著者達——リカード派社会主義の代表者であるトムソン (W. Thompson), 社会思想家で評論家も兼ねていたホジキン (T. Hodgskin), 社会主者で労働運動家でもあったブレー (J. E. Bray), ベンサムの門弟であり後にオックスフォード大学の経済教授となったエッジワース (F. Y. Edgeworth), 等々——の諸見解を取り上げているのだ。しかし小稿でそこまで立ち入って云々することは、もはや不用であろう。ミッチェルが彼の経済学史の著作であえてベンサムを取り上げた所以は、ベンサムの「人間性の概念」にあったし、この概念についてミッチェルが整理・検討しているところを、すでに見てきたからである。

<注>

- 1) Wesley C. Mitchell, *Types of Economic Theory—From Mercantilism to Institutionalism*, New York, Augustus M. Kelley. Publisher, 1969, Vol. I, p.192.
- 2) Ibid., Vol. I, p.192.
- 3) Ibid., Vol. I, p.194.
- 4) Ibid., Vol. I, p.195.
- 5) Ibid., Vol. I, pp.31–32.
- 6) Ibid., Vol. I, p.194.
- 7) Ibid., Vol. I, p.195.
- 8) Ibid., Vol. I, p.196.
- 9) Ibid., Vol. I, p.210.
- 10) Wesley C. Mitchell, *Bentham's Felicific Calculus*, in *The Backward Art of Spending Money and Other Essays*, New York, Augustus M. Kelly, Inc., 1950, p.190.
- 11) Wesley C. Mitchell, op. cit., Vol. I, pp.210–211. ただし () 内は佐々野。
- 12) Ibid., Vol. I, p.211.
- 13) Ibid., Vol. I, p.211.
- 14) Wesley C. Mitchell, *Bentham's Felicific Calculus*, in *The Backward Art of Spening Money and Other Essays*, pp.191–192.
- 15) Ibid., p.192.
- 16) Wesley C. Mitchell, *Types of Economic Theory—From Mercantilism to Institutionalism*, Vol. I, p.212.
- 17) Ibid., Vol. I, p.212.
- 18) Ibid., Vol. I, p.213.
- 19) Ibid., Vol. I, pp.216–217. こうしたベンサムの人間性の概念に対するミッチェルの批判を見ると、次のグルーチの指摘もうなずけるであろう。「ミッチェルの人間性に関する分析は、ヴェブレンと異って、思索的であるよりはむしろ経験的である」(Allan G. Gruchy, *Modern Economic Thought—The American Contribution*, New York, Augustus M. Kelley·Publisher, 1967, p.63)。

むすびに代えて

ベンサム功利主義思想は、いうまでもなく、種々の局面から検討される内容を秘めているであろう。事実また、ミッチェルのベンサムへの言及も、小稿においてそのすべてを見ることはできなかったが、実に多岐に渡ってなされていた。しかしミッチェルが、彼の学史の著作・『経済理論の諸類型——重商主義から制度主義まで』において、独立の章まで設けてベンサムへ言及した所以は、何よりもベンサムの幸福計算——ミッチェルはここにベンサムのオリジナリティを見ていた——の背後にあると解される「人間性の概念」にあった。そこで小稿も、ベンサムのその人間性の概念を中心に問題を起こし、かつそれを論じることで、閉じることにしたい。

さて、ミッチェルによれば、こう解された。およそ経済学は、それが人間行動に関する科学である限り、必ずや何らかの人間性の概念を前提にして構築されている、と。そしてまた、価値—分配を中心的な問題にした古典・新古典派経済学は、そのほとんどがベンサムの人間性の概念を、少なくともそれと大差のないものを前提に構築されている、と解された¹⁾。単にそれだけではない。この人間性の概念がまた、その経済学を大きく特徴・性格づけている、と解された。事実ミッチェルは、この人間性の概念こそ、種々の経済学を「類型」として区別せしめる二大要因中の一つだ、と解していた。とすればここに、ベンサムの人間性の概念への言及は、どうしても避けがたいものとなるであろう。古典・新古典派の経済学の特徴を明らかにしようとするれば、その前提にまで立ち入った原理的理解が必要となるからだ。ミッチェルが彼の学史の著作においてベンサムの人間性の概念を取り上げ、その整理・検討を試みた所以であろう。

ところで、ミッチェルはもちろん、ヴェブレンやコモنز (John R. Commons) ら従来の経済学に批判的であった彼らは、新しい経済学の構築を求めた、いわゆる「制度学派」の代表者として一般に知られている。この彼らが批判の中心にすえたのが、他ならぬ価値—分配を中心的な問題にした古典・

新古典派の経済学であった。すなわち彼らは、この学派的経済学の欠陥をそれぞれに指摘かつ批判し、ここに彼らの新しい経済学の構築に向ったのであった。とすれば、この彼らがそれぞれにものにした学史の著作の中で、等しくベンサムの人間性の概念に言及しているのも、決して故なしとしないであろう²⁾。従来の経済学に対する批判は、それも新しい経済学の構築を求めてなされる批判は、その前提にまで立ち入った原理的批判を必要とするからである。すなわち、新しい経済学の構築は、新しい前提を必要とするからである。そしてまた、この必要に答えるにはまず、従来の経済学的前提に立ち入り、その問題点・限界点を明るみに出すことで、それを否定・排除することが必要となるからである。少なくともヴェルブレンによってなされた従来の経済学に対する批判とは、そうしたものであった。そうであればこそ彼は、彼の新しい経済学（進化論的経済学）を構築すべく、全く新たにその前提を求めざるをえなくなったわけである。こうして、ベンサムの人間性の概念と原理的に対決し、それを否定・排除したヴェルブレンは、ここにそれに代る新しい人間性の概念を求めざるをえなくなった。かくして彼は、彼独自の新しい人間観（本能・習慣的人間観）を樹立し、これを彼の経済学的前提にしたのであった。

以上こうして、まず第一に従来の経済学を原理的に理解するという点から、次いで第二に、従来の経済学を原理的に批判するという点から、その経済学的前提にまで立ち入った言及が必要とされる、と言ってよいであろう。概して両者は不可分の関係にあると言えるわけだが、しかしミッチェルによってなされたベンサムの人間性の概念への言及は、すぐれて前者の色調が濃いものであった。佐々木氏も指摘されているように³⁾、ミッチェルはベンサムの人間性の概念に余り立ち入った批判を加えていなかったし、またハチスンが指摘しているように⁴⁾、その批判はケインズ (John M. Keynes) のそれにさえ及んでいない。一体それは何故か。そしてまた、このことはミッチェルにいかなる結果をもたらすことになるのか。以下、この点について考えてみたい。

さて、ミッチェルによってなされたベンサムの人間性の概念への言及は、それを原理的に批判するというよりは、むしろ原理的に理解するという方向でな

されている、と述べた。しかし、だからといって、ミッチェルがベンサムの人間性の概念を否定・排除しない、というのではない。その否定・排除の仕方が、実はヴェブレンと異なるのである。すなわち、ヴェブレンがベンサムの人間性の概念と原理的に対決することによって、それを否定・排除していたとすれば、ミッチェルはそれを相対化することによって、否定・排除しようとしているのだ。そして、ミッチェルのこのやり方は、彼の学史の研究方法から当然生じてくる結果だ、と解されるのである。学説・理論の内的な継承・発展ということを否定し、それをどこまでも時代の物質的・観念的諸環境の産物だ、と解するミッチェルは、故に学説・理論の変化・発展をもたらすのもこの諸環境の変化に他ならない、と言うのだ⁵⁾。従って、あくまでかかるものとして従来の学説・理論を整理・検討していく彼の学史の研究方法は、かのブローク⁶⁾のいわゆる「相対主義」を明らかにその特徴にしているのである。ミッチェルが理論体系の内部に立ち入るよりも、むしろその体系を構築したその人自身を説明することに関心をもっているといわれるのも、それ故にであろう。

とまれ、ミッチェルのその学史の研究方法が、そのままベンサムの言及に対しても用いられていたことは確かである。彼は言っていた、ベンサムの人間性の概念は、当時のイギリスで一般的かつ支配的となりつつあったものであり、それをベンサムが明白にしたのだ、と。そしてこれも、時代の変化や、「人間性に関する知識の進歩につれて変化を被らざるをえない」⁷⁾ものなのだ、と。こうしてミッチェルは、ベンサムの人間性の概念と原理的に対決することなく、あくまでそれを時代の物質的・観念的諸環境の産物として、いわば相対化して理解した上で、現実的・経験的視点から批判・否定するわけである。すでに本文中で述べたが、ミッチェルは、それが何であれ先験的にこれといって人間性の概念を不動のものとして規定してかかるやり方に反対しているのであり、極力それを避けよというのだ。そして彼は、どこまでも現実の人間行動を観察することの必要性を強調するのである。実は、こうした方向でベンサムの人間性の概念にくわえた批判を、ミッチェルは、一方でその転換を計ったとして高く評価するヴェブレンの人間性の概念にもそのまま向けているのである⁸⁾。この点

はともかく、以上ミッチェルがベンサムの人間性の概念に立ち入った批判をなしていない、あるいはなしえていない原因——少なくともその一部——は、彼の学史の研究方法にあった、と言ってよいであろう。

さてこうして見てくると、もはやミッチェルに、ベンサムの人間性の概念に対置する形での彼独自の人間性の概念を期待することは無理であろう。とすれば、ここに次の疑問が湧いてこないか。すなわち、新しい経済学の構築をミッチェルが求めたことは確かだが、しかしここに構築される彼の経済学は、ヴェブレンのそれとはかなり内実を異にするものになるのではないか、という疑問である。ちなみに、ミッチェルには彼の名を冠せられる経済学の理論はない、と言われている⁹⁾。かくして、ここに想起されるのが、確かにミッチェルにしるコモンズにしる新しい経済学の構築を求めはしたが、しかし彼らにはヴェブレンと異なり従来の経済学に取って代る彼ら独自の経済学の理論を構築しようとする意図はなかった、ということだ¹⁰⁾。

なお付言すれば、佐々木氏は、ミッチェルがベンサムの人間性の概念に立ち入った批判をくわえることができなかった所以を、彼が受容した心理学にあるとして、次のように述べておられる。「ミッチェルはシカゴ大学時代から、ヴェブレンとデューイの影響を被った。そのうえミッチェルは彼の経済学研究の進展につれて、その心理学に対する関心が、デューイの機能主義から行動主義へと広がってゆく。そしてある期間……ウィリアム・マクドウガル (William McDougall) の目的論的行動心理学の影響を被った。しかしやがてミッチェルは、ワトソンの行動心理学を、取り入れるようになったと考えられる。ワトソンの心理学は、その基本的立場において意識と内省とを排除する。彼は行動を刺激に対する反応と説明し、そして習慣形成、習慣統合などを重視する。また彼はのちにあらゆる本能を否定し、極端な環境主義を主張している (原文改行)。それゆえミッチェルがこのような心理学を取り入れるならば、それは必然的にベンタムのような、人間行動を環境の因果的諸力の見地からのみ、一方的に把握する考え方に接近してくる。このようにみえてくるとミッチェルがヴェブレンのようにベンタムの人間性の概念を批判しえないのは、けだし当然のことと思

われる」と¹¹⁾。

こうした佐々木氏の指摘から想起されるのだが、ミッチェルはベンサムの人間性の概念に対してのみならず、その他のベンサムの概念に対しても余り立ち入った批判をなしてはいなかった。それはやはり、彼の学史の研究方法のしらしめるところであった、と言ってよいであろうし、またここに彼の学史の研究方法の限界もあった、と言ってよいであろう。しかしまた、ミッチェルがベンサムの諸概念に余り立ち入った批判をしていなかったという点はもちろんだが、彼のベンサムを論じる全体的な基調がかなり好意的なものであったことに思い至る時、彼らの間には少なからずその志向において共通している点があるのではないか、という思いがどうしても残る。思いつくままにそれを拾い上げてみても、社会改革への情熱、またこの改革に際しての私有財産制度に対する確固たる信念¹²⁾、人間心理の側面への強い関心、それに何よりも社会科学を科学的（数量的）¹³⁾に基礎づけようとする姿勢、等々と、ミッチェルとベンサムとの間には、かなりの共通点を見い出すことができるのである。とすれば、ミッチェルがベンサムを論じる全体的な基調が好意的であったとしても、決して不思議ではないであろう。とはいえ、彼がベンサムのやり方に基づいて、あるいはそれにならって経済学を構築しようとしていたというのでは決してない。事実は全く逆なのだ。というのも、社会科学を科学として基礎づけようとしたベンサムの幸福計算はもちろん、その背後にある人間性の概念も、不適切だとして彼が否定していることには全く変りはないからである。そこで最後に、この点をもう少し詳しく見ておきたい。ミッチェルのベンサム批判の焦点はやはりここにあると解されるからである。

さて、ミッチェルによれば、道德の世界のニュートンたらんとしてベンサムが試みた幸福計算は、たとえそれがベンサムを他の功利主義者から区別せしめる彼のオリジナリティとして高く評価できるものではあっても、失敗だといのであった。なお、この計算はといえば、人間を合理的とみなす現実とそぐわない誤った概念を前提にして考えられたものであった。要するに、この誤った人間性の概念を土壌にして咲いた従花、これがベンサムの幸福計算であった。

故にミッチェルは、ベンサムは道德の世界・人間科学の世界・社会科学の世界のニュートンたりえなかった、と言うのであった。かく言うミッチェルによれば、もともと道德の世界つまり社会科学の世界でニュートンたらしめようと自分が誤りだ、と解されるのである。以下ミッチェル自身に語ってもらおう。

ミッチェルは言う。「その主題の性格からして、自然科学は、精緻な数学的計算に行きつく厳密な論理的方法の適用に道を開く……社会科学は、そうした方法の適用に道を開かない。というのは、人間自身が論理的でもなければ、あるいは従順でもないからである。すなわち、人間は自然環境の諸力によって押されたり引かれたりする受動的原子ではないからである。故に、論理的方法は、社会科学においては、自然科学と同様には適用されないのである。それは次の条件の下でのみ適用できる。すなわち、(1)社会科学は人間行動ではなく制度の論理に係わる、(2)人間は快楽主義的基礎に立つ従順なものだと考えられる、(3)人は統計的データを取り扱い、かつこれらの数字を数学的な意味で検証することだけに論理を用いる、という条件がそれである……故に社会科学をニュートン流のモデルに基づいて構築しようとする試みは、誤りであった」(14)。

以上ミッチェルは、ベンサムが言うように人間は決して合理的でも受動的でもないから、一定の条件下でならともかくも、ニュートン主義的・自然科学的手法をもって社会科学を基礎づけようとする試みは誤りだ、と言うのである。明らかに彼は、社会科学という科学性は、あるいは社会科学という科学的基礎づけは、自然科学というそれらとは異なる、と解しているのだ。しかるに彼によれば、価値—分配を中心的な問題とする古典・新古典派経済学の大部分が、多かれ少なかれ基本的には、ベンサムの人間性の概念・ベンサムの幸福計算を拠にして構築されていた。とすれば、この古典・新古典派の経済学も、ニュートン主義的・自然科学的手法に基礎づけられたものとして、少なくとも社会科学という科学性を主張できるものだとは言えなくなるであろう。たとえそれがいかに精緻化されたものであれ、ミッチェルが価値—分配を中心的な問題にした古典・新古典派経済に批判的であった所以である。しよせん、古典・新古典

派経済学とは、ミッチェルによれば、誤った人間性の概念に基づく推論の体系に他ならない、と解されるのだ。

ところで、「社会科学の世界のニュートン」たらんとしたベンサムを手厳しく批判し、このベンサムと別様の意味で、社会科学にいう科学性を求めて経済学の構築に向った人、これが一般に「制度主義」の創設者とみなされているヴェブレンであった。すなわち彼は、経済学のダーウィン主義的基礎づけを試みることで、その科学化を求めたのであった。従ってベンサムとの対比でいえば、ヴェブレンは、まさに「社会科学の世界のダーウィン」たらんとした人であった。つまるところ社会科学のベンサム的つまりニュートン主義的基礎づけを否定したミッチェルは、ここにそのヴェブレンに注目する。とすれば今や、ミッチェルのヴェブレン論を取り上げることが必要になるであろう。少なくとも、人間行動を説明する科学としての経済学に対するミッチェルの積極的見解・主張を、彼の学史的研究を通じて浮き彫りにしようとするれば、そうである。次号の課題としたい。

＜注＞

- 1) ベンサムの功利主義・人間性の概念が古典・新古典派経済学に及ぼした影響を云々する論者は多い。つまりこうだ。ベンサムは、ジェームズ・ミル (James Mill) を通じて、リカード (David Ricard) やジョン・ステュアート・ミル (John Stuart Mill) に影響を及ぼしたのみならず、ジェボンズ (W. Stanley Jevons) を通じて新古典派経済学にも影響を及ぼした、云々。なお古典派経済学者と功利主義との関係を、かなり詳しく論じている人にプラムナッツがいる (詳しくは、J. プラムナッツ『イギリスの功利主義者達』泉谷・石川・永松訳、福村出版、1974年5月、第7章の参照を乞う)。また、ヴェブレンによれば、ベンサムの功利主義・人間性の概念は、マルクス (K. Marx) にも影響を及ぼしているのである。「それ (階級闘争の理論) は、功利主義にその起源を有する……それは実際、快楽主義の一片であり、ヘーゲルよりもむしろベンサムと関係がある」(Thorstein Veblen, *The Place of Science in Modern Civilisation*, New York, Russell and Russell, 1961, pp.417~418)。またラナーは、述べている。「二人 (ヴェブレンとマルクス) の体系における最も明らかな違いの一つは、心理学のうちにある。マルクス主義は古典派経済学と同様にヴェブレンにとっては陳腐で不可能なベンサムの心理学によって基礎づけられていた」と (Max Lerner, ed., *The Portable Veblen*, New York, The Viking Press, 1961, p.34)。
- 2) ヴェブレンは、*The Place of Science in Modern Civilisation* (New York, Russell and Russell, 1961) に収められた諸論文の中で、コモンズは、*Institutional Economics—Its place in Political Economy* (Modison, The Univer-

- sity of Wisconsin Press, 1859) の第1巻・第6章で、それぞれベンサムに言及している。
- 3) 佐々木晃『制度主義者達と古典派経済理論』, 東洋経済新報社, 昭和57年4月, 129頁。
 - 4) T.W.Hutchison, History of Economic Thought, in Wesley Clair Mitchell—The Economic Scientist, Ed. by A. F. Burns, National Bureau of Economic Research, INC. New York, 1952, p.298.
 - 5) この点詳しくは、佐々野謙治「W. C. ミッチェルの経済学批判——その序説的考察」, 『第一経大論集』第14巻2号, 3～11頁の参照を乞う。
 - 6) M. ブローグ『経済理論の歴史(上)』久保・真実・杉原訳, 東洋経済新報社, 昭和48年8月, 4～5頁。
 - 7) W.C.Mitchell, The Backward Art of Spending Money and Other Essays, New York, Augustus M. Kelley, INC. 1950, p.300.
 - 8) Ibid., p.301.
 - 9) F. C. Mills, Professional Sketch, in Wesley Clair Mitchell—The Economic Scientist, 1952, p.119.
 - 10) コモンズが自らの経済学を構築しようとしたのは、「伝統的な経済理論を排除することではなく、むしろ経済学的な基礎を広げることにあった」(L. G. Harter, John R. Commons—His Assault on laissezfaire, Oregon State University Press, 1962, p.205)。この点、ミッチェルもほぼ同様であったと解される。詳しくは、佐々野謙治『アメリカ制度学派研究序説』創言社, 1982年5月, 109～128頁の参照を乞う。
 - 11) 佐々木晃, 前掲書, 129～130頁。
 - 12) ベンサムの関心は、何よりも「最大多数の最大幸福」にあった。しかも彼は、限界効用は逡減すると解していた。とすれば、所得はより平等に分配された方が、その全部効用は増加する。こうして、最大多数の最大幸福を求める限り、所得はより平等に分配されるべきだ、ということになるであろう。とすれば、所得の不平等をもたらす私有財産制度に、ベンサムは反対してしかるべきであろう。事実ベンサムの影響下、かかる方向をたどった一群の人々がいたことは、ミッチェルが明らかにしているところである(この点、W. C. Mitchell, The Types of Theory—From Mercantilism to Institutionalism, New York, Augustus M. Kelley. Publishers, 1969, Vol. I, pp.226-230の参照を乞う)。しかるにベンサムは、平等よりも安全を重視し、安全と両立する限りで、所得の平等を説いたのである。要するに、「ベンサムおよび彼の学派は、当時としてはひどく急進的であったけれども、私有財産制度は確固として信じていたのである」(Ibid., Vol. I, p.224)。しかるに資本主義制度・私的所有制度に対してミッチェルは言う、それは「人々がかつて考察した社会福祉を促進するための経済組織の中で最良のものだ」と(W. C. Mitchell, The Backward Art of Spending Money and Other Essays, p.144)。
 - 13) ミッチェルが力説する社会科学の統計的基礎づけも、一種の数量的基礎づけであることに変わりないであろう。従って、ミッチェルがその不可能を云々し、否定しているのは、社会科学のニュートンの=ベンサムの数量的基礎づけであって、決して数量的基礎づけそのものを否定しているのではない、ということに注目しておくたい。
 - 14) W. C. Mitchell, op. cit., Vol. I, p.234.